私のキャリアチェンジ vol.23

千葉県立 東金病院
（千葉県）

病 診連携に関心を寄せて家庭医をめざし、今、地域医療に深くかかわる

後期レジデント
賀來 敦 氏

Atsushi Kaku
2000年 岡山大学薬学部大学院卒業
大手製薬会社に入社
01年 保険薬局薬剤師として勤務
03年 旭川医科大学に編入学
08年 旭川医科大学卒業
北斗病院にて初期研修
10年 千葉県立東金病院にて家庭医・総合医後期研修

before

家庭医・総合医課程で後期研修中の賀來敦氏は、国立大学薬学部大学院を卒業後、大手製薬会社のMRとして働いていた時期がある。そのときにかかわったのが病診連携のネットワークづくりだった。MRが地域の診療所と基幹病院の仲介役となり、連携を支援する活動を通し、賀來氏は現場の医療者として病診連携を実践したいと考えるようになった。そこで医師になるため、医学部に編入学した。

病診連携に強い関心を持っていた賀來氏は、医学部在学中に千葉県立東金病院の平井愛山院長が構築した「わかしおネットワーク」を見学するために、同院を訪れたことがあるという。

当時を振り返り、「とにかくすごい、の一言に尽きました。病院、診療所だけでなく、薬局、老人保健施設、訪問看護ステーションまで、地域のあらゆる医療資源にネットワークを広げた実証実験に目を見張りました。使い勝手に多少の問題はあったけれど、ITを活用したヒューマンネットワークづくりに可能性と未来を感じました」と話す。これが賀來氏と千葉県立東金病院の最初の出合いだった。

その後、卒業後の進路を決めるにあたり、賀來氏は家庭医・総合医をめざそうと考えた。この分野なら、薬剤師時代に自分が習得した薬剤の知識や技術を生かしやすいと思ったからだ。そのとき、研修施設を探すためのセミナーで、平井院長と再び出会うことになる。「千葉県立東金病院に興味はあったけれど、研修病院ではないと思っていました。そのセミナーで家庭医・総合医の研修が受けられることを初めて知りました」と賀來氏。

家庭の事情もあり、初期研修は北海道で受けた。しかし、後期研修は千葉県立東金病院で行うことを決め、2010年4月に同院にやってきた。

after

現在、賀來氏は内科に所属し、研修に励んでいる。医師は平井院長をはじめ10人。そのうち勤務医が6人、レジデントは4人だ。研修は、指導医と研修医がペアを組んで行われるが、組み合わせは患者の疾患によって異なる。

同院は5年前、派遣元の大学医局から内科医を引き揚げられ、いわゆる「医療崩壊」の危機に直面した。たった2人の医師で診療を維持しなければならない最悪の状況の中、平井院長は「自分たちの手で医師を育てる」という方針を打ち出した。そして、試行錯誤しながら教育プログラムを構築してきた。さらに、病院だけでなく診療所や薬局、訪問看護ステーション、地域住民など「わかしおネットワーク」で築き上げたヒューマンネットワークの助けも借りながら、まさに地域が一丸となって研修医の教育にあたってきた。

賀來氏が研修を開始したのは、このような一連の活動が実を結び、医師数が二桁台までに回復した時期にあたる。賀來氏は、この数ヵ月間の手応えを「受け持ち患者数に配慮してもらえ、一人ひとりの患者にじっくり向き合える密度の濃い研修が受けられています」と語る。また、救急患者の受け入れなどを通し、地域の診療所と医療連携のトレーニングができることに対しても満足している。

昨年の夏は、同院が一昨年から開催している医学生・薬学生向けの「九十九里地域医療夏季セミナー」の企画にも参加し、セミナー当日は運営の中心を担った。「研修中にこのような活動に時間が取れるのは本当に貴重です。その点、この病院は認容性の高い研修施設だと思います」と評価する。

こうして地域医療にどっぷり漬かって感じることはコミュニケーションの重要性だ。「地域で医療を実践することは他者との連携になり、コミュニケーション能力が何よりも必要になってきます。しかし、これまで自分が受けてきた医学教育を振り返ってみると、一般の社会人が受けているような研修の機会はなかった」。今後は医療者へのコミュニケーション教育にも積極的に携わっていきたいと抱負を語る。

病診連携のネットワークづくりに惹かれて医師となり、その最先端の病院で研修を受ける賀來氏がこう考えるのは必然的なことなのかもしれない。

welcome

「当院が家庭医・総合医課程の後期研修を立ち上げたのは07年になります。現在、賀來先生を含め、3人のレジデントが研修中です」と、古垣斉拡氏は説明する。物事に対して前向きに、かつ真摯に取り組む賀來氏が加わったことで、他の研修医が刺激を受け、現場が活性化したと評価する。

「指導医だけが頑張っても、よい研修ができるものではありません。研修医同士が刺激し合ったり、助け合ったりすることも大切です。これからも全員で成長してゆけるよう、賀來先生にはリーダーシップを発揮してもらいたい」と、古垣氏は期待を込める。

一方で、こんな注文も――。「家庭医・総合医が対象とするのは地域で、そこにはさまざまな年齢層の人々が暮らし、貧富の差もあります。バリエーション豊かな患者に合わせた診療を行っていかなければならないので、その素養を身につけるため、いろいろなところにアンテナを張り、自分の引き出しを増やす作業を心がけてほしい」。

同院では研修医が順調に育ってきたことにより若手中心の現場になりつつある。そういう面においてもやりがいのある職場だ。「診療の担い手となり、つらいことも多いと思いますが、じっくり腰を据えて、数年間粘り強く取り組めば、どこに行っても通用する家庭医・総合医になると期待して育成しています。彼ならば、きっと成功するでしょう」と、古垣氏はエールを送る。

社会経験を積み、医療コミュニケーションにも深い関心を寄せる賀來氏が家庭医・総合医としてどのように成長し、地域医療にかかわっていくのか、その将来が楽しみである。

文・渡辺 千鶴

家 庭医の本領を発揮するために引き出しを増やす努力を

内科副部長・地域医療連携室室長
古垣 斉拡 氏

Furugaki Narihiro
プロフィール後送。

56ページからの全国求人情報もご覧ください！